45

「レメリン解剖図」と「原三信解剖図」について

原[1]　三　信・○原[2]　寛

原三信家には代々伝わる三点の家宝がある。その一つは一六八五年十月十八日、オランダ人ヘンデレキ・オオベイ（Hendrik Obe）からもらった外科免許書で、八人の日本人のサインがある。（横山又右衛門・本木太郎右衛門・石橋助左衛門・中山六左衛門・楢林新右衛門・横山與三右衛門・本木庄太夫・加福吉左衛門）

第二はパレの外科術式図譜絵巻の写しで、楢林鎮山のものより古いものである。

第三が、レメリンの解剖図（Joh. Remmelini「PINAX MICROCOSMOGRAPHICUS」）の写しである。これは本木庄太夫の翻訳で、原三信元弘が写した歳月が貞享四年（一六八七年）九月吉日と記してある図はオランダ人を日本人に変えただけで中はほとんど同じである。

また、イ、ロ、ハの符号を付け別の帳面に日本語の臓器の訳を作っている。この解剖書は日本に残る最も古いものと言われている。最初にこのレメリンの解剖図を翻訳したのは本木庄太夫であるが、その原本は見つからない。この本をもとに鈴木宗云が一七七二年、和蘭全軀内外分合図を出しているがこれも一七〇〇年代以降で、図も翻訳も分りにくいところが多い。

しかし、これらの解剖図から見ると、一六〇〇年代一部ではあるが日本の医療は西洋医学と比べ、そうひけを取るものではない。

しかし、大多数の医師、医学が漢方であった時代（十七世紀）に、このような解剖書が一部には日本で知られていたのは事実である。

それから九十年後一七七四年（安永三年）の杉田玄白の『解体新書』が有名であるが、その時代には日本の知識階級の医家でもこのような解剖学はある程度知られていたと考えられる。また、臓器についての命名も早くから行われていたのではないだろうか。

酒井シヅ先生によると、本木庄太夫が初めてレメリン

の本を訳したのは一六八〇年代の初めであろうと考えられている。また、その前にベサリウスの本の解剖書をオランダ人医師が講義をしているし、それ以前にポルトガル人も西洋医学を伝えている。

このようなことから、西洋の医学及び解剖学の知識が一六〇〇年代に一部とは言え、日本に知られていたと考えられる。

また、江戸幕府が鎖国を確立し、キリスト教を厳重に取り締まった結果として、公には西洋の文化を公表しにくくなった時代ではあるが、医学などのように実用的であり、当時の漢方で治らない病気、特に外科系の医療は代々「一子相伝」的に伝えられたものが日本各地にあったのであろうと思われる。

その証明として、原三信が写したレメリン解剖書は日本人に渡る前にすでに男体図の右下のキリスト像は削られ、墨で補修されている。（順天堂大学　酒井シヅ教授による。）

一六〇〇年代日本にもたらされたこの本も最初は大名家（稲葉正則）の所有であったと思われるが、江戸時代後期に伊良子家旧蔵となり、最後は小川鼎三蔵書となっている。

このように一部とはいえ、ある程度の人々が関心を持って写していたのである。

今後もこれらの資料を研究し、より確実な考察をしていきたい。

（1）医療法人原三信病院
（2）医療法人原土井病院